学内発表会要旨

岡山県真庭郡落合町方言の研究

――文末詞について――

今石元久

これは、岡山県真庭郡落合町（旧国名＝美作国、人口約二万人、主に農業・交通機関＝姫新線及び岡山市方面へのバス）を調査地とし、一九六二年一月七日～同四月七日の臨地調査による資料にもとづいている。

第一類　単純感声的文末詞

(一)ナ行文末詞

【ナー・ナ】

全文末詞中、頻度の最も高いもので、年齢層をとわず行なわれている。それはほぼ次のような表現形式の中に生きていて、相手へのなげかけを発揮しているといえよう。待遇品位は中以上である。

呼びかけ表現にあらわれる「ナー」

○アン　ナー。あのねえ。小女→青女（「ナー」がよく利いている。）

「共同把握」の「ナー」

○ソレニシチャー　ワカゲナ　ナー。　初老女→青男（共感を誘うようである。）

「ジャー　ナー。（全くですねえ。）」などの「ナー」もここに属そうか。

勧めの表現にあらわれる「ナー」

○マー、チョット　オアタンサェー　ナー。まあちょっと炬燵におあたりなさいな。初老女→私（うながしの濃い「ナー」である。）

挨拶表現にあらわれる「ナー」

○ゴクローサン　ナー。　中女→初老女

前例では丁寧なものいいとなっているが、ここでは近接性・親近性が強い。

感動表現にあらわれる「ナー」

○ンマー、バリキジャ　ナー。あれまあ、元気じゃなあ。初老女→同男

問いの表現にあらわれる「ナ」

○ナン　ナ。　何ですか。老男→私

軽い問いとなっている。それは又、

○モー　エー　ナ。　ナー。もういいの？ねえ。小女→中女

のように確かめの強い「ナ」がある。

概して短呼形は問いかけの表現に限って認められる。

【ノー】

○ヒーロヤン　チョーレー　ノー。弘っ公はうすのろじゃなあ。（年上者を揶揄した小男の独白）のような「ノー」がある。年齢層のいかんにかゝわらず認められるが、主に男性のものいいにおいてである。それも家庭内とか親近者間に限られ、品位は低い。頻度はさがる。

複合形には〔ナー・ナ〕のはたらきの活発さをうらづけるかのように、〔ゾナー・ゾナ〕〔カナ〕〔ガナ〕〔トナ〕〔ンナラナ〕などがある。〔ノー〕の複合形としてわずかに〔ゾノー〕がある。（なぜ複合形式のむすびつきがこのようになされているかについては今後の問題とする。）以上の複合形は主に年輩者層に認められる。

(二)ヤ行文末詞

【ヤー・ヤ】
○サッチャン　ヤー。　小女→幼女
呼びかけ表現となっている「ヤー」である。待遇品位は中。
○ザブトン　ダセー　ヤー。　オバーサン。
老男→初老女〈来客を前にして〉
命令の文にはたらく、うながしの「ヤー」がある。これは勧誘表現においても認められる。また、短呼「ヤ」もほぼ「ヤー」と同様であるが長呼形の方が訴えかけが強い。品位は中。
○オバーサン、モドッテ　ヤ。お婆さん、帰ったのかい。老男→老女
たしかめの強い「ヤー」で、品位は中以上。
○チガワー　ヤ。　ちがうわい。小男→同
のように、強い反撥表現となる「ヤ」である。品位は低い。
以上のことから用法を　呼びかけ・うながし・確かめ・強めの類にまとめてみることができるであろう。

【エ】
○エー　カ。　ワスレルナ　エ。　いいか。
忘れるなよ。　初老男→小男
のような禁止の文のほか、命令・問いの文などにはたらく「エ」では「念おし」がある。
年少者に対するものいいにおいてなされ、品位は中程度である。次に、
○ソリャー　ソー　エ。　それはそうだよ。
青男→初老男
強い当為の「エ」で、品位は低い。
以上、「エ」の用法は、ほゞ二類にまとめられよう。家庭内でさかんである。

【ヨー・ヨ】・略
複合形には〔カヤー〕〔ナラヤー〕〔カエ〕〔ノエ〕〔ゼヨー〕〔ゾヨー〕などがある。

第二類　準感声的文末詞

【ゼー・ゼ】
○アー　ジャロー　ゼー。まあ、変なことを言うのねえ。小女→私
「ゼー」は推量形述部を受ける場合が多く、誇張性がある。品位は低い。短呼形もほゞ同じ作用性が認められよう。

【ゾー・ゾ】
○オジーチャンノ　ゾー。　老男→幼男
ミカンをだいている孫をかわいさのあまりからかって、一種の強調性が含まっている。
「ゾー」は近接性・親近性の強いものいいとなる。
○ヌカシタラ　オエーン　ゾ。オマエー。
〈球を〉のがしたらだめだよ。お前。小男→同女「ゾ」では親近性がうすく、注意の喚起となる。第二類中、次の〔デー・デ〕について、〔ゾー・ゾ〕は盛んである。品位は中以下。

【デー・デ】
第二類中、最も頻度が高い、告知・依頼の表現などにあって、強調性が含まっている。品位は中以下である。
○クイック　デ。ヨーマノ　カワー　ショーリャー。くいつくよ。犬をからかっていると。中男→小女

第三類　原生単純形文末詞
これまで観察を試みたものが感声的なものであったのにくらべ、ここにみる文末詞は非感声的ともいえよう。

【カ】
さまざまの用法が認められる。
単純な問いの「カ」　品位、中
○タルキュー　ウチョータ　カ。垂木をとりつけていたの？中女→私
強い確かめとなっている「カ」、品位、中以下。
○インナハル　カ。お帰りなさるかね。
老男→私
自問表明の「カ」品位、中。

○ウラー　イクマー　カ。俺は行くまいと思っているのだよ。初老男→青男〈ためらいなし〉
当為強調の「カ」、品位中以下。
○ワシガ　ジランネー　シルモン　カ。初老男→青男〈俺が知らんのにお前にわかるか。〉以上の「カ」の作用性はもともとから「問い」と思われる。これが文表現となってそれぞれの個性を生じているようである。
複合形に「ノカ」「ンカ」などがある。

第四類　転成文末詞

以上の本来的な文末詞に対し、第四類は転成の事実を認めうる文末詞である。

㈠助詞系

【ノ】

次のような二類の用法を指摘しうる。
○イナン　ノ。帰らないの？　小女→同
の「ノ」は、問いにはたらく。品位は中。
○チューシャガ　キレタラ　オエンノ。
〈母の病状を問われて〉　中男→同
「ノジャ」的な断定の気持があらわれている。前例にくらべ、品位はやゝ高い。
「…ノー。」とでるか「…ノ。」とでるかにより表現形式は決まっている。

【ン】

○ヨシー　イキナハツタ　ン。吉部落にお行きになりましたか。　老女→私
問いにはたらくのが普通である。品位は中以上。また、
○イク　ンン。〈母のところに〉中女→幼女
のように累加し、「念おし」をうち出すものも認められる。品位は中。

【ト】

○キョー　ロクジニ　オクリジャト。今日六時に出棺だって。　中女→初老男
報知の「ト」が盛んである。品位は中。

【ガ】（待遇品位は低い。）

○ハヨー　イリナエー　ユンジャ　ガ。早く〈風呂に〉おはいりってば。　小女→小男

【ネー】（待遇品位は中程度である。）

○サキョー　ノンダラ　イツデモ　アノテジャケー　コマル　ネー。（うちの子は）酒を飲んだらいつでもあんなふうなので困まるのよ。　初老女→私

㈡助動詞系

【ナラ】

○コリャー　メッソー　メズラシー。ナンナラ。　これはとてもめずらしい。一体なにかね。　初老女→青男
「ナラ」は問いにはたらき、ぜひ知りたい気持をあらわす。品位は中以下。頻度は高い。
複合形に「ンナラ」がある。

㈢動詞形

【チャ】（頻度は高い。待遇品位は低い。）

○マー、キキヤエー　チャ。まあ聞いてくれってば。　切老男→同
自己まるだしの粗野な表現となる。

【トミナサエー・トミナエー】

「…と思いなさい。」といった述部的本来の機能を失い、訴えかけが強い。年輩者層においてわずかに認められる。品位は中以上。
○ソエーツマー　ドーモ　オモエーダセン　トミナサエー。それについはどうも思い出せませんですねえ。　切老男→私
○ワカラン　トミナエー。〈ちょっと〉わかりませんねえ。老男→私（前例より近接性が増す。）

㈣名詞系　・略

㈤代名詞系

【ワエー】

（年輩者層に認められ、品位、中以上。）
○オッツアン。ヌクー　ナッタ。ワエー。
老男→同
のようにゆったりした話ぶりとなる。

【ワー】

○エー　ワー。いいねえ。　青女→青男

願望をあらわす「ワー」がある。品位、中以下。

なお以上のほか「…すワい。」とうけとられるものに次の事例がある。品位は中上。

○アレガ　イチバン　エー　デサー。
あれが一番いいですよ。　老男→私

○ヨーオ　ワスレトリ　マサー。ムカシノコトジャ。
すっかり忘れていますよ。　老男→私

以上は、落合町の生活語に認められるいちいちの文末詞がどういう表現形式をとってあらわれ、その意味作用を発揮しているか、といった一種の観察・記述のもとで、表現形式一般の把握へのあしがかりをつけてみようとしたものである。

参考書　国語学第十一輯　藤原与一先生の論文、「日本語表現法の文末助詞―その成立と生成―」　「伊賀方言の文末詞」佐藤虎男氏（国文学攷二三号）

（本学三年）